

富岡に障害者向け授産施設

「不況弱者」に働く場

リストラの対象になりやすい障害者に働く場を、との思いを込めて、富岡市内にこのほど、知的障害者向けの通所型授産施設「水土舎」がオープンした。新里村でハム製造会社を経営する金谷透さん（53）が中心になって設立したもので、作業には障害者も指導に当たる。金谷さんは「通所者とともに障害者である職員も自立意識を高め、ゆくゆくは施設運営の先頭に立ちたい」と期待している。

新里のハム製造会社経営者ら 私財から一部出資



午後の作業の打ち合わせをする水土舎の利用者ら—富岡市後賀で

水土舎は富岡市後賀の畑地に、興や市からの補助金に金谷さんらの出資金も加え、約一億三千万円をかけて今年一月一日に開所した。建物は延べ約五百四十平方メートルで、現在、定員三十人に対し、富岡市をはじめ高崎市、安中市、下仁田町、妙義町などから二十二人が通っている。

金谷さんが授産施設の建設を思い立ったきっかけの一つは、不況によって職場を失う障害者が多いと知ったこと。通所者のある女性（30）も、二年前に雇われた製造会社から次第に「休むように」と言われるようになり、昨年十月、「い」ちくになって退職。「リストラされたようなもの」とこの女性には受け止めている。職員は十人。このうち指導員の鶴沢良雄さん（50）、調理の補助を担当する

圭一さん（30）は軽度の知的障害者だ。二人とも金谷さんの会社に住み込み、ハムを作ってきた経験を買われ、水土舎の職員に抜てきされた。

作業は月一土曜日の午前八時半—午後五時半。ハムとジャムを中心に作る予定だが、今はまだ設備が十分でないため、市民から借りた農園でジャム用のブルーベリー、イチゴなどを栽培している。鶴沢さんは「指導員といってもまだ分からないことはかなりだけれど、毎日の作業で慣れていきました」と語る。

「障害者は内にもりがちで、リストラの対象にされない」と語る。金谷さんは「当面、この金額を越えることを目標にして